

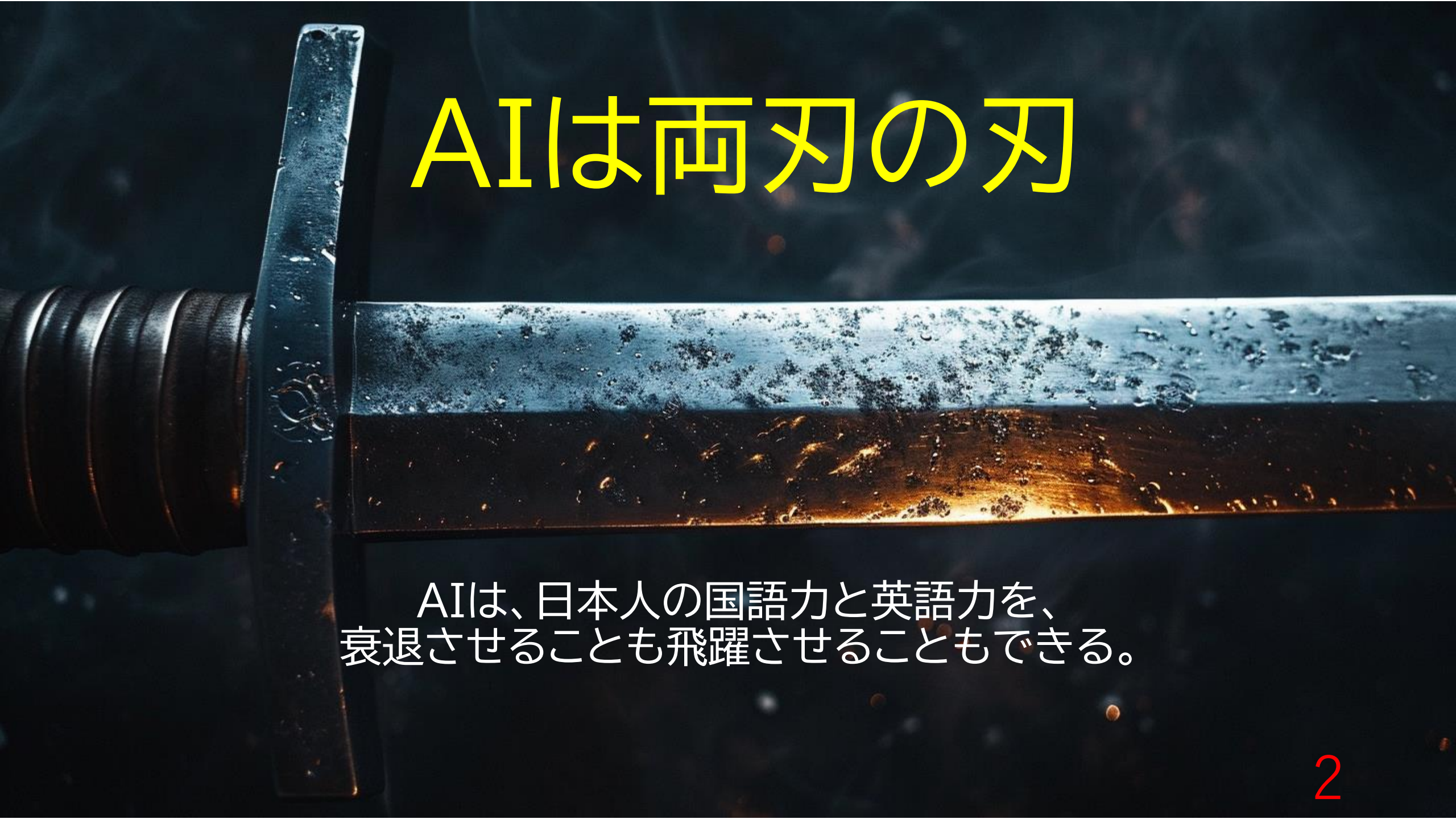


吾輩は猫である。
日本語の行末を
少々懸念しておる。

第15回産業日本語研究会シンポジウム（2024年2月20日（火）：オンライン開催）
「生成AIの普及で日本語のコミュニケーションがどうかわるのか」
招待講演2 13:45-14:25（質疑応答なし）

文化越境的日本語か 文化内在的日本語か： AIを活用した大学英語ライティング 教師が抱く葛藤

京都大学 国際高等教育院
柳瀬陽介



AIは両刃の刃

AIは、日本人の国語力と英語力を、
衰退させることも飛躍させることもできる。

本日の構成

1. 大学英語ライティング授業でのAI活用

1. 抑制的な利用を積極的に推進：破壊的テクノロジーの葛藤
2. DeepL利用と日本語の限界：翻訳の葛藤
3. 英語執筆とChatGPTによる改訂：AI格差という葛藤

2. 日本の言語教育の現状分析：歴史・地政学・テクノロジー受容の観点から

1. 歴史：国語の熟成と起こりうる衰退
2. 地政学：英語圏の亜周辺
3. テクノロジー受容：日本語と英語にとっての両刃の刃

3. 文化越境的日本語執筆とAIを使った自己英語翻訳

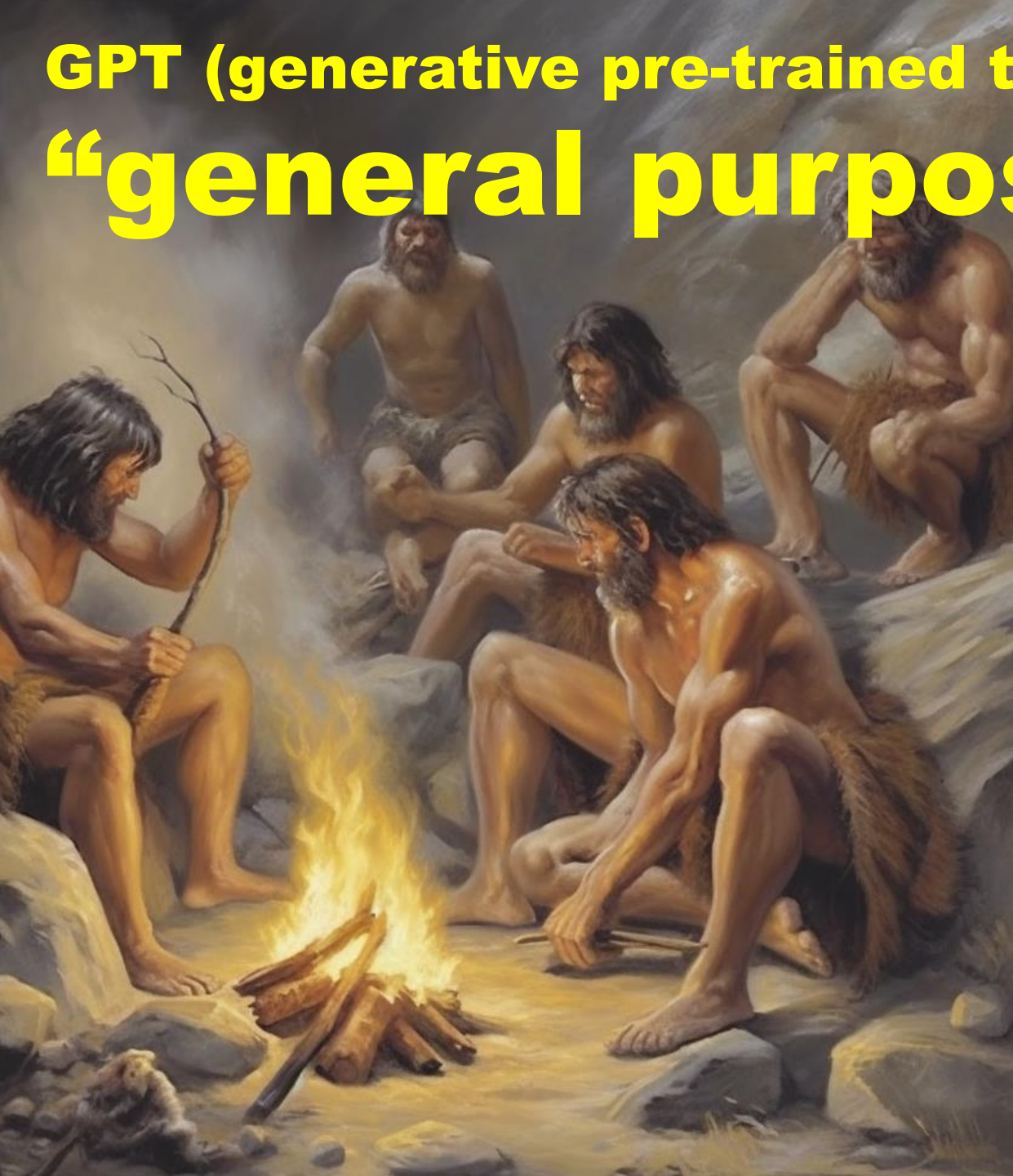
1. 文化越境的日本語表現者：柄谷行人と村上春樹を例に
2. 文化越境的日本語の指針：ビジネス対応と移民対応
3. AI利用による自己英語翻訳：二次出版

1 大学英語ライティング 授業でのAI活用

- 1.1 抑制的な利用を積極的に推進
- 1.2 DeepL利用と日本語の限界
- 1.3 英語執筆とChatGPTによる改訂

1.1 抑制的な利用を積極的に推進

**GPT (generative pre-trained transformer) also means
“general purpose technology”**



**Nevertheless, it is
not error-free.**

大規模言語モデルであるChatGPTでさえ、**言語の理論的理解は不正確**
(大津由紀雄慶應義塾大学名誉教授からの教示)

Human: You're a language teacher. Let's think step by step. How many persons are involved in the sentence, "**Jane is looking at a boy with red binoculars with black binoculars**"?

ChatGPT: The sentence "Jane is looking at a boy with red binoculars with black binoculars" is a bit ambiguous due to its structure, but it most likely involves two persons:

1. ****Jane****: She is the subject of the sentence.
2. ****A boy****: He is the object of Jane's gaze.

The ambiguity arises from the phrase "with red binoculars with black binoculars." This could be interpreted in two ways:

- **Jane is using black binoculars to look at a boy who has red binoculars.**
- Alternatively, it could mean that Jane is using a pair of binoculars that are both red and black to look at the boy.

Given the structure of the sentence, it's more likely that the first interpretation is correct, and the sentence is describing what Jane and the boy each have. However, the ambiguity makes it a bit unclear.

Human: What color binoculars is Jane looking at a boy with?

ChatGPT: In the sentence "Jane is looking at a boy with red binoculars with black binoculars," the color of the binoculars Jane is using is ambiguous due to the sentence's structure. However, the most common interpretation would be that Jane is using black binoculars. **This is because the phrase "with black binoculars" directly follows "Jane is looking,"** suggesting that the black binoculars are the ones Jane is using to look at the boy.

破壊的テクノロジー(disruptive technology) への適応

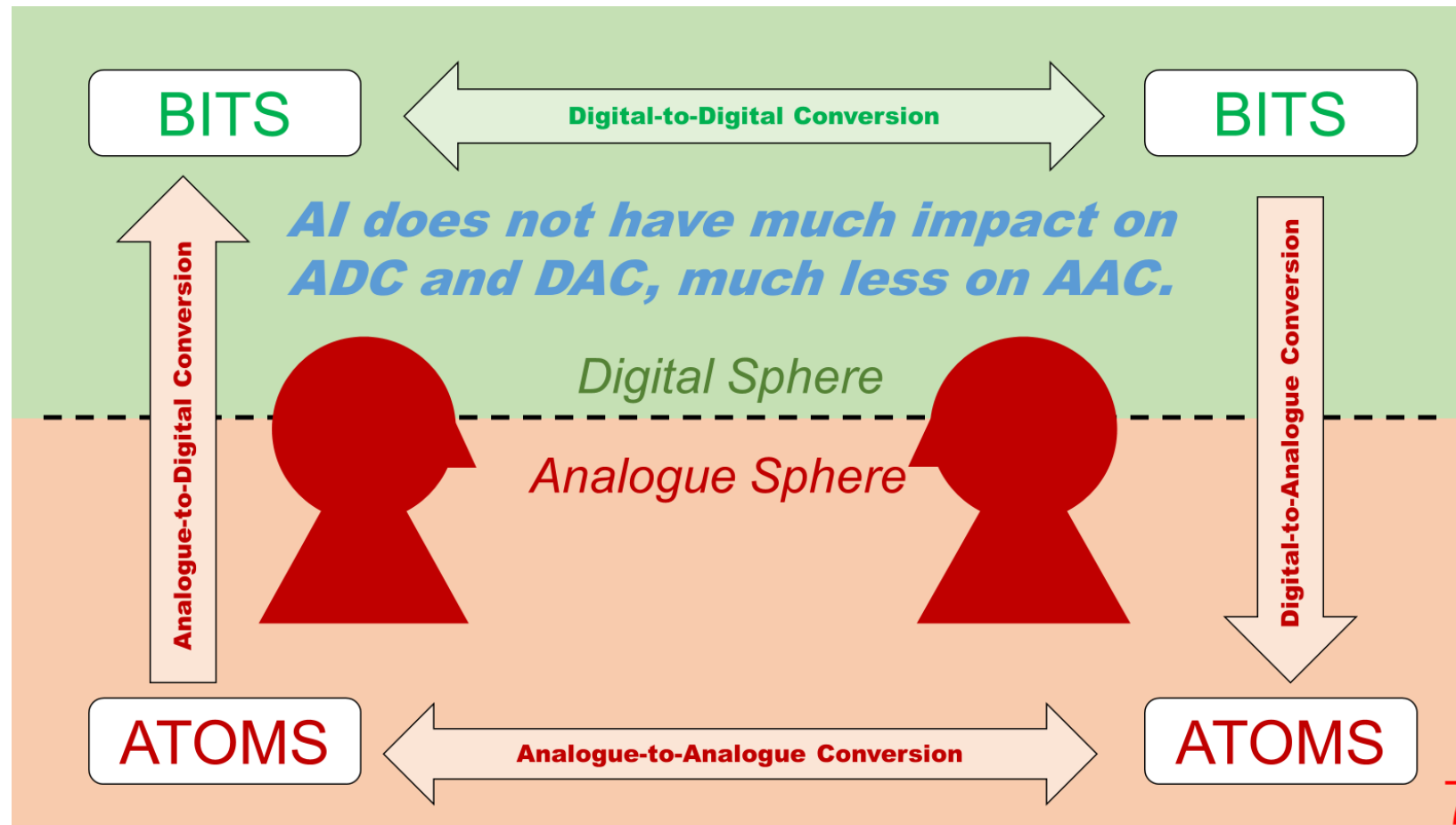
- 学生のAI（汎用テクノロジー）利用を禁止するより、**学生にAI利用を学ばせる**べき。
- だが、汎用テクノロジーは破壊的テクノロジーでもある。
- **破壊的テクノロジーへの対応の失敗は、教育と学習の崩壊。**

➔ 語法添削と文体改訂という大規模言語モデルAIにとっての**抑制的な利用法**を積極的に推進

- 国立情報学研究所「教育機関DXシンポ」での発表
 - 大学英語教育におけるChatGPT活用型授業実践：英語教師が認識する生成系AI活用の可能性と限界
 - <https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/10/dxchatgpt.html>



AIを使う人間についての基本認識1： 言語のデジタル処理以外は人間の仕事



柳瀬陽介（印刷中）
「AI 時代における第 2 言語としての英語力：大規模言語モデル AI の可能性と限界からの考察」『JACET 中部地区紀要』

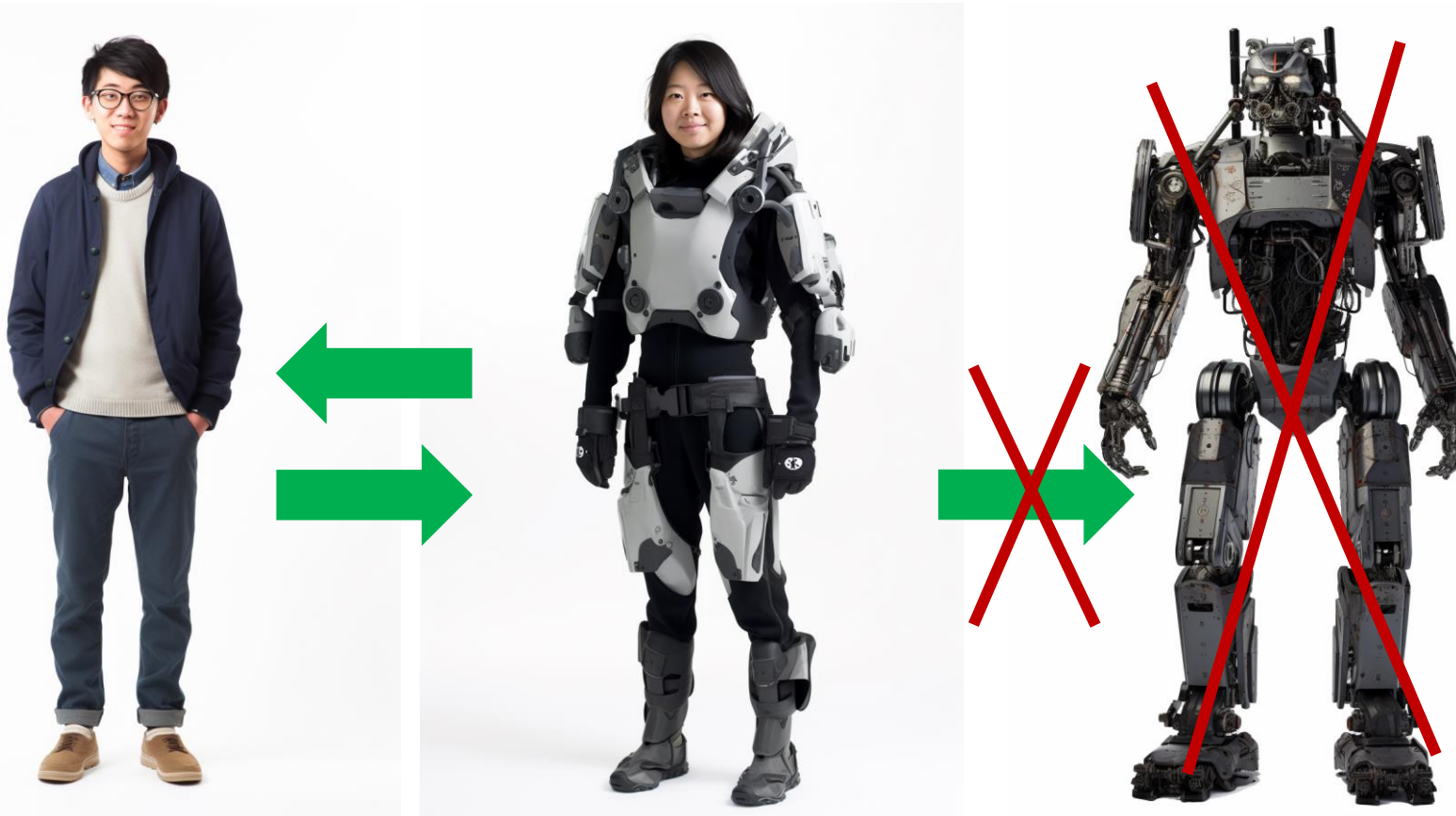
【招待論文】

AI 時代における第 2 言語としての英語力
—大規模言語モデル AI の可能性と限界からの考察—
Redefining Second Language English Proficiency in the AI Era: From the
Analysis of the Potential and Limitations of Large Language Model AI

柳瀬陽介
京都大学 国際高等教育院
YANASE, Yosuke
The Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

身体的能力の開発が必須

AIを使う人間についての基本認識2： サイボーグ：生身の力を拡張する



柳瀬陽介（2022）
「機械翻訳が問い直す知性・言語・言語教育：サイボーグ・言語ゲーム・複言語主義」

https://doi.org/10.24781/letkj.7.0_1

外国語教育メディア学会関東支部研究紀要
Vol. VII (2022)

機械翻訳が問い直す知性・言語・言語教育
—サイボーグ・言語ゲーム・複言語主義—

柳瀬 陽介
京都大学

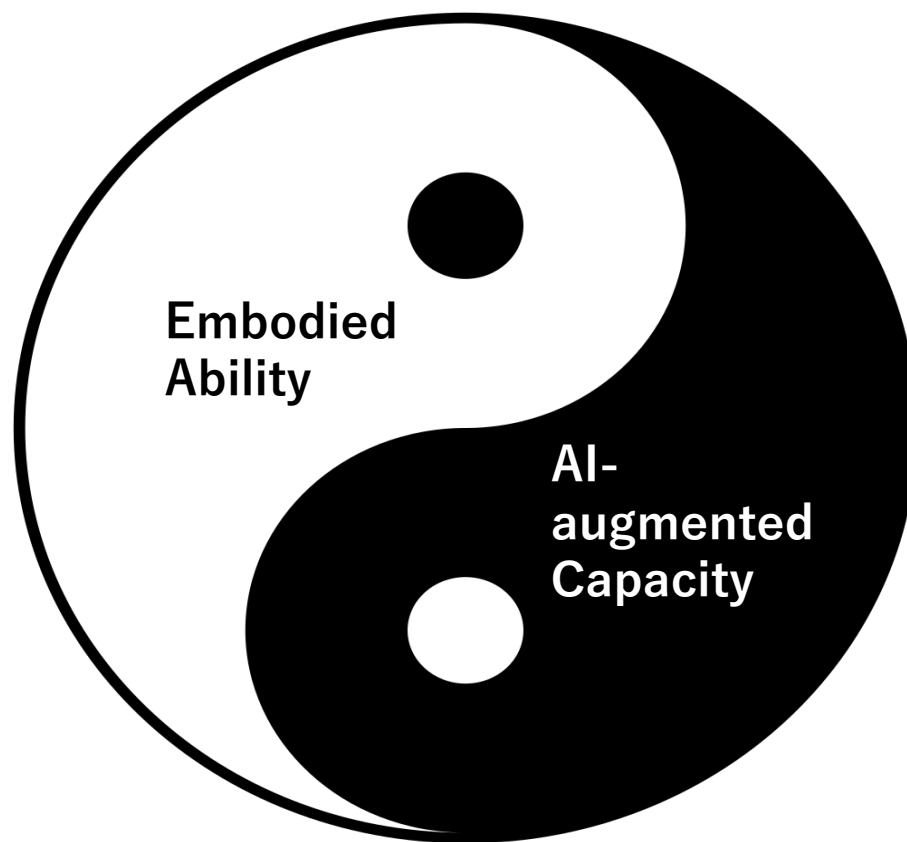
LET Kanto Journal
Vol.7 (2022)

The Concepts of Intelligence, Language, and Language Education
Revisited by the Development of Machine Translation—Cyborgs,
Language Games, and Plurilingualism

YANASE, Yosuke
Kyoto University

“Augmentation, not replacement.”

AIを使う人間についての基本認識3： 身体的能力とAI拡張的能力が相互浸透



Integrated Proficiency

英語の身体的能力がAIによって拡張され、
その拡張された能力が、身体的能力をさらに高める。

柳瀬陽介（印刷中）
「AI時代における第2言語としての英語力:大規模言語モデル AIの可能性と限界からの考察」『JACET中部地区紀要』

【招待論文】

AI時代における第2言語としての英語力
—大規模言語モデル AIの可能性と限界からの考察—
Redefining Second Language English Proficiency in the AI Era: From the
Analysis of the Potential and Limitations of Large Language Model AI

柳瀬陽介
京都大学 国際高等教育院
YANASE, Yosuke
The Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

AI as a great equalizer?

AIで格差を縮小？

- 思考・表現力の格差：日本語 > 英語
→ 機械翻訳は、母国語での思考の速度と精確さを英語に反映しやすい。
- 技能の格差：リーディング力 > ライティング力
→ AIでの英文改訂で、ライティング力をリーディング力に近づける。
- 国際的認知度の格差：英語 > 日本語
→ AIで、日本語の知性の国際的認知度を上げることができる。

1.2 DeepL利用と日本語の限界

3編の実践報告 どれも英語翻訳（二次出版）付き

京都大学国際高等教育院紀要 第5号

実践報告

日本語（L1）から英語（L2）に機械翻訳 されたアカデミックエッセイにおける エラーの分類

—京都大学 EGAP ライティングクラスで得られた
具体的な結果と一般的な示唆—

柳瀬 陽介、デイヴィッド リーズ *

<https://doi.org/10.14989/ILAS 5 59>

Survey and Practical Report

Categorizing Errors in Machine- translated Academic Essays from Japanese (L1) to English (L2): Some Specific Findings and General Implications from Kyoto University EGAP Writing Classes

Yosuke Yanase, David Lees*

J-STAGE 資料・記事を探す J-STAGEについて ニュース&PR サポート

外国語教育メディア学会関東支部研究紀要

資料トップ 巻号一覧 この資料について

J-STAGEトップ / 外国語教育メディア学会関東支部研究紀要 / 7 巻 (2022) / 書誌

招待論文

機械翻訳が問い直す知性・言語・言語教育

—サイボーグ・言語ゲーム・複言語主義—

柳瀬 陽介

著者情報

ジャーナル フリー HTML

2022 年 7 巻 p. 1-18

DOI https://doi.org/10.24781/letkj.7.0_1

https://doi.org/10.24781/letkj.7.0_1

LET Kanto Journal
Vol.7 (2022)

The Concepts of Intelligence, Language, and Language Education
Revisited by the Development of Machine Translation—Cyborgs,
Language Games, and Plurilingualism

YANASE, Yosuke
Kyoto University

京都大学国際高等教育院紀要 第6号

実践報告

大学教養・共通教育における 機械翻訳活用型英語ライティング授業の 成功のための諸要因

—制度・言語能力・原理的理解・教材・フィードバックの
5つの観点から—

柳瀬 陽介 *

<https://doi.org/10.14989/ILAS 6 19>

Survey and Practical Report

Factors for Successful English Writing Classes Using Machine Translation in Liberal Arts University Education: Five Perspectives of Curriculum, Language Proficiency, Theoretical Understanding, Teaching Materials, and Feedback*

Yosuke Yanase*

DeepL活用型の英語ライティング授業

• 授業手順

1. アウトラインと原稿を日本語で完成
 - 学習者の思考レベルに合わせた英語ライティング指導
2. DeepLで英語に翻訳
 - DeepL翻訳の正確性をチェックさせる。
3. 英語の文体的特徴を教えた上で、DeepL英語翻訳を改訂させる

• 反省点

- 前編集 (pre-editing) なしの日本語からは、読みにくい英語が出力される。
- 文体改訂作業が、DeepLの不備の修正作業のよう。
- 前編集については、ある程度の方針を策定（次ページ参照）
 - 産業日本語研究会の「特許ライティングマニュアル」をその後に知り、驚く。
- かといって、「英語」の授業で国語指導を行うことは憚られた。
 - 英語教育通念としての単一言語主義 (monolingualism)
- ライティングの「生身の力」の育成不足
 - 「AIネイティブのための英語教育」をAIノン・ネイティブが考えることの危険性

学術的・実用的文章の基本原則

1. One Idea in One Unit
2. Why-What-So What
3. Context-Problem-Response
4. Essential Point First
5. Consistent Perspective
6. From Old Information to New Information
7. A short Sentence with One Idea
8. Agent + Action
9. Ellipsis for Clarity
10. Technical Terms in English.

情報の科学と技術

[資料トップ](#)[巻号一覧](#)[おすすめ記事](#)[この資料について](#)

[J-STAGEトップ](#) / [情報の科学と技術](#) / [73 巻 \(2023\) 6 号](#) / [書誌](#)

特集：科学研究分野・学術コミュニケーションにおける言語問題

AIを活用して英語論文を作成する日本語話者にとっての課題とその対策

柳瀬 陽介

[+](#) 著者情報

キーワード: [生成系AI](#), [ChatGPT](#), [機械翻訳](#), [DeepL](#), [ストーリー](#), [文体](#), [語法](#)

ジャーナル

オープンアクセス

2023 年 73 巻 6 号 p. 219-224

DOI

https://doi.org/10.18919/jkg.73.6_219

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/73/6/73_219/article/-char/ja/

ひと目で分かる特許ライティングマニュアル



文レベル

1 短文にする ～短くシンプルな文にする～

一文を短くして複雑な係り受けをなくすことで、人間の理解が容易になり、機械翻訳時の誤訳を減少できる。ただし、短文化する際は、意図しない内容とならないように注意する。

2 省略しない ～隠れている要素がないか 注意する～

主語や目的語などの省略された要素を明示して、文意を明瞭にする。

3 理解しやすい 構成にする ～文の構成に注意する～

文の構成を工夫することで、理解しやすく翻訳しやすい文にすることができる。

4 横並びの要素の 表現を揃える ～対等に並べ意味に注意する～

要素を対等に並べることで文章に構造をもたせ、係り受けを明確にし、理解しやすくする。

5 読点を工夫する ～係り受けや文の構造を 明らかにする～

適切な位置に読点をつけることで、係り受けや文の構造を明らかにする。

6 簡潔にする ～シンプルな表現にする～

不要、冗長、難解な表現を避け、元の文の意味が変わらない簡潔な表現を用い、シンプルな文にする。

7 言い換える ～誰にでも伝わる表現にする～

多義的な表現やあいまいな表現は、明確・具体的な表現に改める。日本語特有の表現は、訳しやすい表現に改める。

節・句レベル

語レベル

<https://tech-jpn.jp/tokkyo-writing-manual/>

1.3 英語執筆とChatGPTによる改訂

ChatGPT活用型の英語ライティング授業

- 授業手順

1. アウトライン作成は日本語で行う

- 高速で精確な思考

2. 以下のプロセスを5回繰り返し英文エッセイを完成（後期授業なら1,000語）

1. 学生はAIを使わずに英語を執筆。

2. 学生はChatGPTフィードバック（以下の5種類）を入手

- 1) 語法が添削された英文; 2) 添削のポイント説明; 3) 米国高校生レベルの英文改訂（文体改善）; 4) 米国大学生レベルの英文改訂; 5) 学術誌レベルの英文改訂

3. 学生はChatGPTフィードバックから学んだこと、および自分なりの改訂版をまとめたレポートを作成

4. 教師はレポートに対してコメントし一般的な教示もする。

3. 期末テストで学生は、何も参照せずにエッセイの短いバージョンを書く。

- 反省点

- 1回の英文執筆で200語書けない学生もいる。

プロンプトは無料公開

英語教育の哲学的探究3

このブログの主目的は、(1)英語教育について根本的に考え直すこと、(2)英語教育現場の豊かな知恵をできるだけ言語化すること、です。このブログでの見解などは柳瀬個人のものであり、必ずしも柳瀬が所属する組織や団体などのものではありません。ブログ管理での技術的理由から「英語教育の哲学的探究2」よりこのブログに移行しました。なお私が所属する京都大学・国際高等教育院・附属国際学術言語教育センター・英語教育部門のウェブサイトでは、学生さんの自律的な英語学習・使用を支援するための情報を多く提供しています。 https://www.i-arrrc.k.kyoto-u.ac.jp/english_jp

<https://yanase-yosuke.blogspot.com/2023/11/ver4chatgpt-3.html>

2023/11/14

【Ver.4.2に改訂】ChatGPT学術英語ライティング添削・改訂プロンプト -- 語法添削と3種類の改訂例を出力

■ プロンプトの目的

このプロンプトは大学生に学術英語ライティングを教えるためのものです。学生が自分で書いた英文に対して、AIが語法添削と3種類の文体改訂を提示します。大学生は学術英語の文体に慣れていませんから、自分の英文がどのようにAIに改訂されるかを見て、文体感覚を育てます。なお、ここでの学術英語文体は、日本の大学生が多用しすぎる、一人称・二人称代名詞や疑問文を一律に禁じています。実際の論文ではそれらの表現も巧みに使われることがありますが、ここでは教育の一過程として、まずはそれらを避けるように指導しています。

ブログアーカイブ

- ▶ 2024 (1)
- ▼ 2023 (62)
 - ▼ 11月 (5)
 - 大津由紀雄・南風原朝和（編）(2023)『高校入試に英語スピーキングテスト？ 東京都の先行事例を...
 - 【Ver.4.2に改訂】ChatGPT学術英語ライティング添削・改訂プロンプト -- 語法添削と3種...
 - 英語を使いながらドイツ語会話を学ぶプロンプト (ChatGPT/GPT-4)
 - "Think in English" と "fluency" についてのYouTube動画リスト -...
 - Learn English with TV Series 楽しみながら英語を学ぶ

目指すのは英語学習者の自律。
大学英語教育の目的は、英語学習者を英語使用者に変えること。

Ver. 4.2での例

1/6 学生の英文

Many people love music, but do not know anything about speakers. Do you know that many speakers have holes? They are usually round, but sometimes not round. They are big fluto and make big bass sound. These speakers, by the way, are called ported speakers, because holes are ports. Because of ports, these speakers make big sound although they are not really big in size. People like big bass and company sell these speaker for this reason. But some people like sealed box speakers that doesn't have holes. They know holes are bad for sound. You should know more about speaker. So I'll explain why ported speaker are bad in this essay.

2/6 語法添削

1. Usage Correction:

Many people love music but do not know anything about speakers. Do you know that many speakers have holes? They are usually round, but sometimes not. They produce a big flute-like and deep bass sound. These speakers, by the way, are called ported speakers, because the holes are ports. Because of the ports, these speakers produce a big sound although they are not really big in size. People like a deep bass, and companies sell these speakers for this reason. But some people prefer sealed box speakers that do not have holes. They know holes are detrimental to sound quality. You should learn more about speakers. So, I will explain why ported speakers are inferior in this essay.

Ver. 4.2での例

3/6

添削のポイント

2. Usage Issues:

- a. "do not" instead of "do not know": Corrected to maintain subject-verb agreement.
- b. "They are big fluto" to "They produce a big flute-like": Corrected for clarity and coherence.
- c. "make big bass sound" to "deep bass sound": Changed for better word choice and accuracy.
- d. "because holes are ports" to "because the holes are ports": Added the definite article for clarity.
- e. "People like big bass and company sell" to "People like a deep bass, and companies sell": Corrected for grammatical accuracy and clarity.
- f. "these speaker" to "these speakers": Corrected for plural consistency.
- g. "doesn't have" to "do not have": Corrected to match subject-verb agreement.
- h. "holes are bad for sound" to "holes are detrimental to sound quality": Improved wording for academic style.
- i. "more about speaker" to "more about speakers": Ensured plural consistency.
- j. "explain why ported speaker are bad" to "explain why ported speakers are inferior": Improved academic phrasing and corrected plural agreement.

Ver. 4.2での例

4/6 米国高校レベルの改訂

3. Revision 1: High School Level:

Many people enjoy music but lack knowledge about speakers. It is interesting to note that numerous speakers have holes. These are generally round, but can vary in shape. They produce a significant flute-like and deep bass sound. Such speakers are termed 'ported speakers' because these holes act as ports. The presence of ports enables these speakers to produce a substantial sound despite their moderate size. A deep bass sound is popular among consumers, leading companies to market these speakers. However, there is a preference among some individuals for sealed box speakers, which lack holes. They believe that holes compromise sound quality. It is beneficial to understand more about speaker types. Therefore, this essay will elucidate why ported speakers may be considered suboptimal.

Ver. 4.2での例

5/6 米国大学レベルの改訂

4. Revision 2: College Level:

Many individuals appreciate music but often lack understanding about the technical aspects of speakers. Notably, a significant number of speakers feature holes, typically round in shape, though variations exist. These speakers generate an expansive flute-like sound along with deep bass. Termed as 'ported speakers,' these devices utilize holes as ports, enhancing their sound output despite their relatively compact size. The preference for deep bass tones drives the commercial success of these speakers. Conversely, some audio enthusiasts opt for sealed box speakers, devoid of holes, believing that this design ensures superior sound quality. A comprehensive understanding of speaker technology is valuable. Consequently, this essay will critically analyze the drawbacks of ported speakers.

Ver. 4.2での例

6/6 学術誌レベルの改訂

5. Revision 3: Academic Journal Level:

A substantial segment of music enthusiasts, while passionate about the art, often exhibit limited knowledge regarding speaker technology. A prevalent feature in many speaker designs is the inclusion of holes, predominantly circular but occasionally deviating in shape. These openings contribute to the generation of an expansive, flute-like sound spectrum and pronounced bass frequencies. Referred to as 'ported speakers,' these devices employ holes as acoustic ports, effectively augmenting their sonic output in spite of their modest dimensions. The consumer inclination towards pronounced bass responses has propelled the marketability of these speakers. In contrast, a segment of audiophiles demonstrates a preference for sealed box speakers, which eschew such openings, based on the premise that this enhances sound fidelity. An in-depth comprehension of speaker design principles is advantageous. Thus, this essay intends to offer a critical examination of the limitations inherent in ported speaker systems.

学生の英文判断力が鍵。
リーディング力（および
その前提のリスニング力と
スピーキング力）が必須。

ChatGPT改訂を使った英語ライティング授業を 一年間実践してみたの见解

- **学習者**：AIが普及する時代に、なぜ・どのように英語を学ぶべきかを納得すれば、熱心に英語を学ぶ。
 - 期末テストの出来は予想よりもよかった。
 - テストは提出した英語エッセイの短い版を、何も参照せずに書くもの。
 - ただし、日頃の活動でAI不使用を徹底する仕組みはある程度必要。
 - 仕組みが崩れ、学習者が時間に追われたら、密かにAIを使う可能性は高まる（人間は弱い存在）。
 - **教員**：AIに対して感情的反発をしたり無作為を決め込むと、学習者の密かで不正なAI使用は増えるのではないか。
- ➔ AIに対する反感や無理解が英語教育を形骸化させる危険性
- ➔ 反面、学習者の意欲を育てればAIは学習を向上させる。

まとめ

1.大学英語ライティング授業でのAI活用

1.1 抑制的な利用を積極的に推進

➡汎用テクノロジーとして使わざるを得ないが、破壊的テクノロジーは使い方を間違えれば教育と学習が崩壊という葛藤

1.2 DeepL利用と日本語の限界

➡AIでの英語翻訳には国語指導が必要であるという葛藤

1.3 英語執筆とChatGPTによる改訂

➡AIは学ぶ意欲のある者の言語力をますます高め、学びから逃避しようとする者にいくらでも逃げ道を与えるという葛藤

本日の構成

1. 大学英語ライティング授業でのAI活用

1. 抑制的な利用を積極的に推進：破壊的テクノロジーの葛藤
2. DeepL利用と日本語の限界：翻訳の葛藤
3. 英語執筆とChatGPTによる改訂：AI格差という葛藤

2. 日本の言語教育の現状分析:歴史・地政学・テクノロジー受容の観点から

1. 歴史：国語の熟成と起こりうる衰退
2. 地政学：英語圏の亜周辺
3. テクノロジー受容：日本語と英語にとっての両刃の刃

3. 文化越境的日本語執筆とAIを使った自己英語翻訳

1. 文化越境的日本語表現者：柄谷行人と村上春樹を例に
2. 文化越境的日本語の指針：ビジネス対応と移民対応
3. AI利用による自己英語翻訳：二次出版

2 日本の言語教育の現状分析： 歴史・地政学・テクノロジー受容の観点から

- 2.1. 歴史：国語の熟成と起こりうる衰退
- 2.2. 地政学：英語圏の亜周辺
- 2.3. テクノロジー受容：日本語と英語にとっての両刃の刃

2.1 歴史：国語の熟成と起こりうる衰退

日本の政治・経済の潮流と言語状況

- 19世紀後半：植民地主義・帝国主義への抵抗
 - 国民国家と国語の形成、英学から英語翻訳へ
 - ←夏目漱石『三四郎』（1904, M41）
- 20世紀前半：植民地主義・帝国主義への加担
 - 近代日本文学の隆盛と英語教育廃止論の登場
- 20世紀後半：民主化と経済復興
 - 「翻訳調」の衰退（日本語の成熟）と英語教育の実用化への試み
- ここまでの21世紀：グローバルな新自由主義への対応
 - 日本語の衰退の兆しと内実を欠く英語力
 - ←九段理江『東京都同情塔』（2024, R6）

夏目漱石 『三四郎』 (1904, M41)

登場人物 (時代背景は日露戦争の後)

- 広田蓑 (ちょう) : 漢籍の伝統を基盤にして英語を読む年長の知識人
 - 野々宮宗八 : 英語論文を書き西洋でも知られる若き自然科学者
 - 小川三四郎 : 広田と野々宮に影響を受け、同年代の里見美禰子に翻弄される迷羊 (ストレイシープ、stray sheep)
- ➔ 「言語文脈低依存」の知識人の国際的競争と「言語文化高依存」の知識人の日本での不全感は、現代にまで続いている。

『三四郎』に注目すべきことは、水村美苗『日本語が亡びるとき』に教えられました。

『三四郎』から120年後の第170回芥川賞受賞作品
九段理江 『東京都同情塔』 (2024, R6)

- 2023年下半期芥川賞受賞
- 描かれる現代日本の言語状況
 - 知識人の怠惰とも思えるカタカナ英語の多用
 - SNSなどで定型表現化された倫理
 - ことばによって自らに痛みを感じることがない生成AIの能弁
- 日本語による自己疎外
- 小説の言語自体でこういった言語状況を再現
- 主人公の台詞「日本人が日本語を捨てたがっている」
- 漢籍の素養を失いカタカナ英語を乱用するも、英語が身につけているか怪しい現代日本の知識人
- さらにSNSや生成AIからのことばが身体に侵食していく状況

2.2. 地政学：英語圏の亜周辺

柄谷行人(2014)『帝国の構造』の 「中心・周辺・亜周辺」の類比的解釈

<中心>：英語を第一言語とする国

- 現代の<中心>は、古代の「帝国」に似ている。19世紀的な「帝国主義国民国家」と違って、宗主国言語の強制は行っていない。
 - Kachruの“inner circle”に相当

<周辺>：英語を第二言語とする国

- <中心>により植民地支配された歴史的事情などにより、国内で英語が恒常的に使われる国
 - Kachruの“outer circle”に相当

<亜周辺>：英語を外国語とする国

- <中心>による植民地支配から免れたなどの事情により、国内での英語使用は自ら選択できる国。ただし人口が少ない国では、出版や放送で英語が多く使用される。
 - Kachruは“expanding circle”と表現

英語圏の＜周辺＞としてのインド

国民の約10%は国際的に活躍できる英語話者。
しかし、国内最大のヒンディー語ですら「過去の言語」

"In north India, English does remain a language of privilege. So Hindi and the vernacular languages are important, but they are the languages of culture. They are the languages of the past. They might be the register of emotions, in some ways. We might kind of curse each other in Hindi. [LAUGHS] But the language of the future is English."

Transcript: Lydia Polgreen Interviews Pratap Mehta

<https://www.nytimes.com/2023/12/12/podcasts/transcript-lydia-polgreen-interviews-pratap-mehta.html>

英語圏の<亜周辺>の国々

- ドイツやフランスなど
 - 自国語の出版や放送を重んじるも、学術やビジネスにおいて英語使用が増える。
- 北欧諸国など
 - 人口が少ないので出版や放送においても英語が侵入し、学術やビジネスでも英語が多く使われる。
- 日本
 - 自国語の出版や放送を重んじるし、学術やビジネスにおける英語使用もまだ及び腰。
 - 英語との「言語的距離」が遠い
 - 書籍は縦書きが多く、アルファベット表記を行いにくい。

2012年創業の会社（社員約2100名）のCEO
（京都大学卒、ペンシルベニア大学ウォートン校MBA修了）

「私だっ
て、英
語の勉
強に
すごく
時間
を使っ
てお
り、
本当
は、
今
の技
術
で、
あ
ら
ば、
読
み
書
き
は
A
一
う
な
だ
い
レ
ク
ト
コ
ミ
ユ
ニ
ケ
ー
シ
ョ
ン
は
（
自
動
翻
訳
が
普
及
す
る
ま
で
）
ま
だ
時
間
が
か
か
る
こ
の
時
間
軸
に
自
分
の
未
来
と
こ
の
ク
を
か
け
ら
れ
る
か
ど
う
か
だ
」

「英語の会議だと、途端に
みんな口数が少なくなる。
だから英語の場合、前日
まで、メモを送ってもいい、
それをチャットGPTなど
に、入れて、読むときは日本
語訳したり、質問を英訳し
たり、という使い方をして
いる」

「開発が間に合わないため、英語しか話せないエンジニアに開発力を強化するためエンジニア部門の公用語を英語にする」と決めた」

他の企業では、AI導入により翻訳業務時間が1/5から1/10に削減。その結果、労務費が削減され、より本質的な業務に時間を割ける。

村尾：時間短縮ですね。翻訳業務にかかる時間が1/5～1/10になりました。もちろん、チェックや手直しは以前と同様に行うのですが、その労力がまったく違います。作業が減って生まれた時間で、私は考える時間を持てるようになりました。事業の方向性や、課題があるとしたらそれはどのように解決すればいいかなど、より本質的な業務に時間を割けるようになりました。

ナワラー：私もそうです。短時間で3言語の資料が作成できるので、研修の内容についてより深く考えられるようになりました。

<https://miraitranslate.com/example/dakin/>

山田：業務効率向上効果は高いと思います。これは当社での試算ですが、翻訳業務にかかる工数削減効果は一人当たり年間90時間と見ており、これを労務費に換算すると20万円ぐらいになります。200名ならグループ全体で4,000万円の労務費が削減できることになります。

<亜周辺>の日本で起こりうる悪いシナリオ

- 多くの若者が、AIがあるので英語や外国語は勉強する価値がないと考える。
- 多くの英語教師が、AI対応を怠り、授業が学習者の密かなAI使用で無効化するか、AIに代替されるような単純な英語力訓練ばかりになる。
- 多くの社会人が、英語使用をAIにほぼ完全代行させてしまう。
- 英語からAIで翻訳される日本語は、作業用の便宜的なもの
 - 安直な日本語使用による日本語の凋落
- 日本語からAIで翻訳される英語も、同様
 - 日本語話者が発する英語の国際的競争力が喪失
- 口頭での英語会話でも日本語話者はAIに依存
 - 国際的信頼関係醸成に不成功
- 英語以外の外国語はさらにAIに任せきり
 - 国際的視野を失い、ますます米国依存になる日本

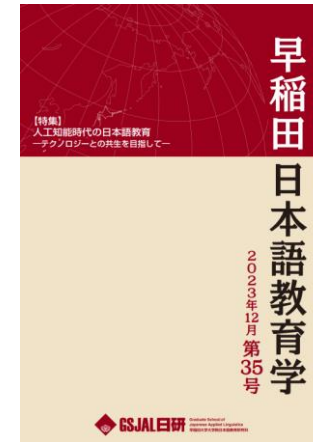
2.3 テクノロジー受容： 日本語と英語にとっての両刃の刃

AIによる英語力ひいては国語力の劣化？

- **AI**：日本語母語話者が日本語の枠組みから出ることなく英語を使うことを可能にする。
- **学校英語教育**：教師がAI普及を見て見ぬふりをして、AI対応を怠り、授業がさらに形骸化
- **書き言葉**：英語力に基づいた精査を伴わない機械翻訳やAI改訂
 - **AI英和翻訳**：精密な意味やニュアンスの喪失と誤読の増加。創意工夫に富んだ翻訳語が創造されない。多数の国民にとって不可解なカタカナ英語が増える。
 - **AI和英翻訳**：AIが出力した英語の精密な意味やニュアンスがわからず、英語話者に誤解をもたらし国際的信頼度を落とす。
- **話し言葉**：人格的な信頼関係を築きにくい面会
 - 機械が介在すると、眼差しと情動の共有がしにくい。
 - 通訳という異文化をよく知る媒介者を欠く機械翻訳

AIの濫用がもたらす悪い可能性： AIの抑制的利用を積極的に推進する人間の懸念

- AIが機械的測定の普及を促進し、英語教育が現実世界のコミュニケーションからさらに乖離する可能性。
- 日本の次の世代がさらに内向きになるが、そこには『東京都同情塔』で描かれたような言語文化しかない可能性。
- 翻訳力も含めた英語力の衰えが、やがて国語の力の喪失につながる可能性。



特集：人工知能時代の日本語教育—テクノロジーとの共生を目指して—

「英語力」をこれ以上商品化・貨幣化
するためにAIを使ってはならない
—技術主導の問いから人間主導の問いへ—

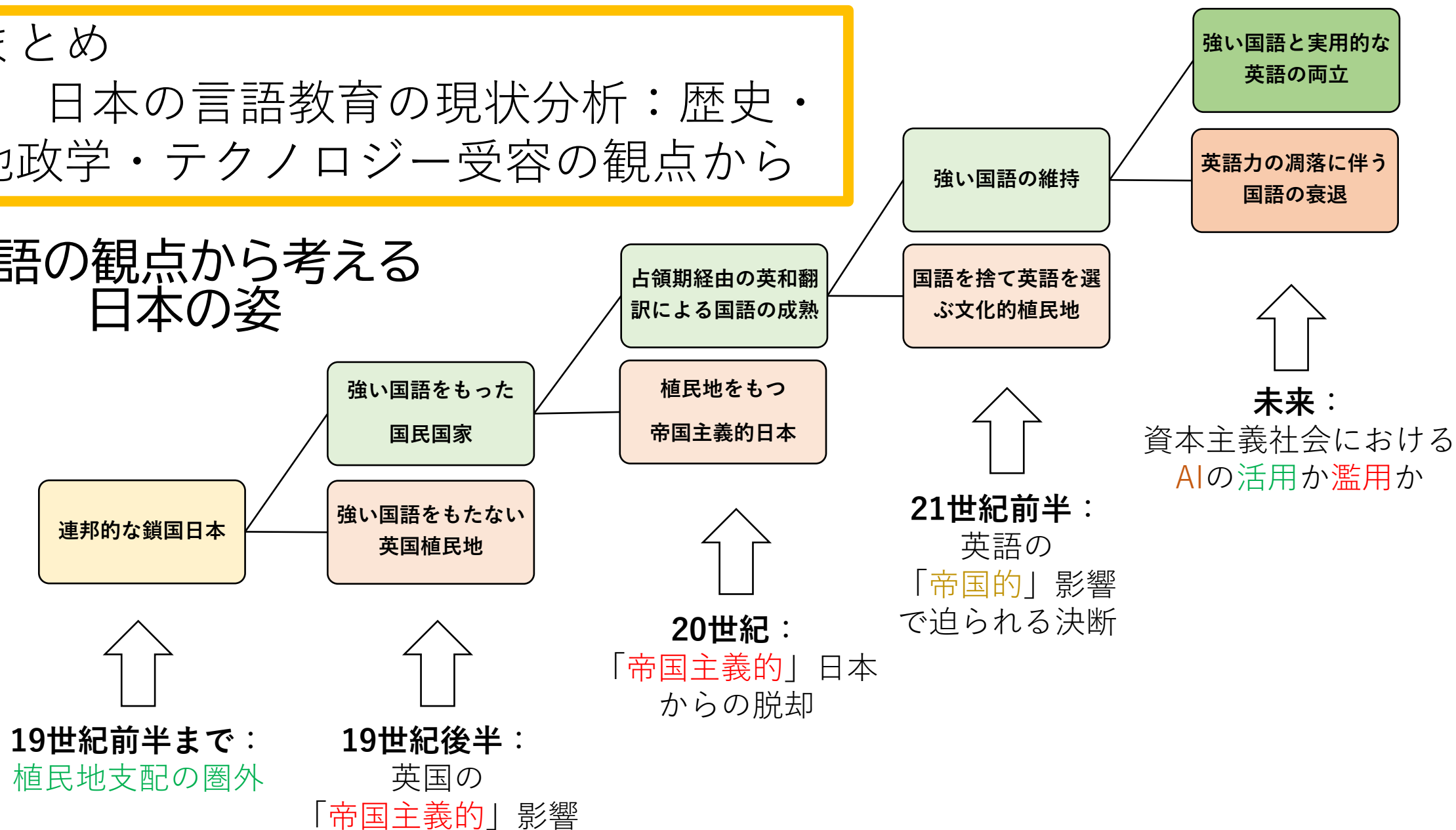
柳瀬 陽介

https://waseda.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=1704950219732

まとめ

2 日本の言語教育の現状分析：歴史・地政学・テクノロジー受容の観点から

言語の観点から考える 日本の姿



本日の構成

1. 大学英語ライティング授業でのAI活用

1. 抑制的な利用を積極的に推進：破壊的テクノロジーの葛藤
2. DeepL利用と日本語の限界：翻訳の葛藤
3. 英語執筆とChatGPTによる改訂：AI格差という葛藤

2. 日本の言語教育の現状分析：歴史・地政学・テクノロジー受容の観点から

1. 歴史：国語の熟成と起こりうる衰退
2. 地政学：英語圏の亜周辺
3. テクノロジー受容：日本語と英語にとっての両刃の刃

3. 文化越境的日本語執筆とAIを使った自己英語翻訳

1. 文化越境的日本語表現者：柄谷行人と村上春樹を例に
2. 文化越境的日本語の指針：ビジネス対応と移民対応
3. AI利用による自己英語翻訳：二次出版

3 文化越境的日本語執筆と AIを使った自己英語翻訳

- 3.1 文化越境的日本語表現者：柄谷行人と村上春樹を例に
- 3.2 文化越境的日本語の指針：ビジネス対応と移民対応
- 3.3 AI利用による自己英語翻訳：二次出版

3.1 文化越境的日本語表現者： 柄谷行人と村上春樹を例に

柄谷行人

- 1965年東京大学経済学部卒業
- 1975-1977年にアメリカ・イェール大学客員教授
- 2022年 - バーグルエン哲学・文化賞（アジア初の受賞）
- 日本語の著作が多いものの、以下の書物などが英語で刊行（一部は自ら英訳）
 - *Origins of Modern Japanese Literature*, 1993
 - *Architecture as Metaphor*, The MIT Press, 1995
 - *Transcritique : On Kant and Marx*, The MIT Press, 2003
 - *History and Repetition*, Columbia University Press, 2011
 - *The Structure of World History : From Modes of Production to Modes of Exchange*, Duke University Press, 2014
 - *Nation and Aesthetics: On Kant and Freud*, Oxford University Press, 2017
 - *Isonomia and the Origins of Philosophy*, Duke University Press, 2017
 - *Marx: Towards the Centre of Possibility*, Verso, 2020

『大江健三郎 柄谷行人 全対話：世界と日本と日本人』（2018）の中の柄谷の発言

普遍的な仕事と地域的な仕事での分裂を受け入れつつ、
その二つを同時的に遂行する

柄谷行人「世界的に通じる仕事をすべきなのか、日本の現実にコミットしてやるべきなのか、たえず迷っています。しかし、この分裂は、僕だけのものではないと思うんです。日本が世界で置かれている位置に関係しているわけです。僕が持っている分裂や落差の感覚は、もともとあるものではないか。さっき、思考することと現に在ることの落差の意識が批評だといいましたが、その意味では、この二つの系列を同時的にやることが批評的なものではないか、と思っているんです。」（p. 65）

いずれ翻訳されるという前提で日本語の文章を書く

柄谷行人「僕は、常に世界で読まれていると思っています。それは『マルコポーロ』*が読まれるのと似たような意味です。つまり、多くの人を読むなどとは思っていない。しかし、だれかが、そしていずれは読むということを想定している。」(p. 156)

柄谷行人「つまり、外国語でやった場合には通用しないことが書かれているということです。(中略) ドゥルーズでも何でもいいですが、そういうものを論じたり理論を借りたりしているような文章をフランス語に翻訳するとどういうことになるか。まったく価値がなくなってしまうんです。」(p. 154)

* 1995年に文藝春秋社の雑誌『マルコポーロ』は、ホロコーストに関する掲載記事に対してアメリカのユダヤ人団体サイモン・ウィーゼンタール・センターなどからの強い批判を受け、自主廃刊を決定した。

自ら英語翻訳をする際に可能な削除や加筆

柄谷行人「日本語で欧文脈という言い方がありますが、そういう文章でも英語とは違いますね。何が違うかということ、**文と文のつながり**という**か転換が違うように思います**。僕は自分で日本語で書いたものを英語にしようとする**と、それに気がつきます**。自分がやると、もとの日本文自体を消してしまうんですね。**翻訳者だと、それを一応すべて受け取った上で英語に通用するように工夫するわけですが、僕本人がやると、通じないところは全部消してしまいます**。翻訳を前提して書いた文章でさえも、いざ英語にしようとする**と、いかに日本語的であったかということに気付くんですね。**」(p. 168)

一つの国語が世界的に流通していることを受け入れて、
その言語に自覚的に依拠する

柄谷行人「さっき僕は世界資本主義といっても、国民経済はなく
ならないと言いました。世界貨幣というものはなくて、たとえば、
アメリカ合衆国の貨幣であるドルがその役割をするだけです。言
語も同じで、世界言語はなくて、どこかの国語がそのように機能
する。英語を国語にするのは一国だけではありませんが、それ自
体、イギリス・アメリカの政治・経済的な世界支配のなかで広
がってきたものです。そういう不愉快さはありますが、僕自
身は英語に依拠するほかありません。」（p. 156）

自らの地域性を否定せずに普遍性に向かう

柄谷行人「僕は實際上、ここ十七、八年間、自分の仕事をやるたびに、これは翻訳されるであろうと考えてやっているわけです。事実そうなっているし、今後もふえていくと思うんです。しかし、もっと気楽にやれなかったらどうかと思うときがあるんですね。それは今のところできない。超自我みたいなものに規制されている。だから、どこかで羽目を外したいというか、絶対翻訳できない日本語を書いてみたい気持ちがありますね。それを認めておかないと、ある時期にひっくり返る可能性がありますから。その両義性を認めておこうと思っているわけです。」(p. 168)

村上春樹

- 1975年早稲田大学卒業（7年間在学）
- 1991-1992年プリンストン大学客員研究員・客員講師
- 2005年ハーバード大学客員講師
- 2008年プリンストン大学より名誉博士号（文学）
- 2009年エルサレム賞受賞
- 2011年6月カタルーニャ国際賞受賞

日本語で執筆。多くの英語作品を日本語翻訳もする。ただし、国際的評価を得るようになった自作の英語翻訳は英語を母語とする翻訳者によるもの。

『職業としての小説家』での述懐

自分の書いた小説言語に満足できず、
一度、英語で書き始める。

村上春樹「発想を根本から転換するために、僕は原稿用紙と万年筆をとりあえず放棄することにしました。万年筆と原稿用紙が目の前にあると、どうしても姿勢が「文学的」になってしまいます。そのかわりに押し入れにしまっていたオリベッティの英文タイプライターを持ち出しました。それで小説の出だしを、試しに英語で書いてみることにしたのです。とにかく何でもいいから「普通じゃないこと」をやってみよう。

もちろん僕の英語の作文能力なんて、たかがしれたものです。
(中略) でもそうやって文章を書き進めているうちに、
だんだんそこに僕なりのリズムみたいなものが生まれてきました。」(p. 36)

書いた英語を見ながら日本語に翻訳・移植

村上春樹「とにかくそういう外国語で書く効果の面白さを「発見」し、**自分なりに文章を書くリズムを身につけると**、僕は英文タイプライターをまた押し入れに戻し、もう一度原稿用紙と万年筆を引っ張り出しました。そして机に向って、**英語で書き上げた一章ぶんくらいの文章を、日本語に「翻訳」していき**ました。翻訳といっても、がちがちの直訳ではなく、**どちらかといえば自由な「移植」に近いものです**。すると**そこには必然的に、新しい日本語の文体が浮かび上がってきます**。それは僕自身の独自の文体でもあります。僕が自分の手で見つけた文体です。そのときに「なるほどね、こういうふう to 日本語を書けばいいんだ」と思いました。まさに目から鱗が落ちる、というところですよ。(p. 38)

新たなリズムで文章を書く喜び

村上春樹「小説を書いているとき、「文章を書いている」というよりはむしろ「音楽を演奏している」というのに近い感覚がありました。僕はその感覚を今でも大事に保っています。それは要するに、頭で文章を書くよりはむしろ体感で文章を書くということなのかもしれません。リズムを確保し、素敵な和音を見つけ、即興演奏の力を信じること。とにかく真夜中にキッチン・テーブルに向って、新しく獲得した自分の文体で小説（みたいなもの）を書いていると、まるで新しい工作道具を手にしたように心がわくわくしました。とても楽しかった。そして少なくともそれは、僕が三十際を前にして感じていた心の「空洞」のようなものを、うまく満たせいてくれたようでした。」(p. 40)

新たな実験による日本語の再生

村上春樹「それを日本語に対する侮辱ととる人も、中にはいるかもしれません。実際にそういう批判を受けたこともあります。しかし言語というのはもともとタフなものです。長い歴史に裏付けられた強靱な力を有しています。誰にどんな風に荒っぽく扱われようと、その自律性が損なわれるようなことはまずありません。言語の持つ可能性を思いつく限りの方法で試してみることは、その有効性の幅をあたうかぎり押し広げていくことは、すべての作家に与えられた固有の権利なのです。そういう冒険心がなければ、新しいものは何も生まれてきません。僕にとっての日本語は今でも、ある意味ではツールであり続けています。そしてそのツール性を深く追求していくことは、いくぶん大げさにいえば、日本語の再生に繋がっていくはずだと信じています。」 (p. 39)

翻訳者を見つけてアメリカ人の作家と同じスタンスに立つ

村上春樹「もうひとつの要因は、僕が「日本人の作家」であるという事実をテクニカルな意味合いで棚上げし、**アメリカ人の作家と同じ土俵に立ってやっていこうと、最初に決心したこと**にあるのではないかと思います。僕は自分で翻訳者を見つけて個人的に翻訳してもらい、その翻訳を自分でチェックし、その英訳された原稿をエージェントに持ち込み、出版社に売ってもらうという方法をとりました。そうすれば、エージェントも出版社も、僕をアメリカ人の作家と同じスタンスで扱うことができます。つまり外国語で小説を書く外国人作家としてではなく、アメリカの作家と同じグラウンドに立ち、彼らと同じルールでプレイするわけです。」(p. 229)

翻訳者はテキストに対する愛を共有する

村上春樹「やってみればわかるけれど、翻訳というのは本当に骨の折れる厄介な作業です。でもそれは一方的に骨の折れる作業であってはならない。そこにはお互いギブアンドテイクのような部分がなくてはなりません。外国に出ていこうとする作家にとって、翻訳者は何より大事なパートナーになります。（中略）そしてまずテキストに対する愛がなければ、翻訳はただの面倒な「お仕事」になってしまいます。（p. 242）

日本や東アジアの地域的な感覚が
一歩遅れて世界的な感覚として認識される

村上春樹「そう考えれば、日本という社会は、そのような相対的
ランドスライド（地滑り）を、欧米社会よりもむしろ早い段階で、
あるい意味では自明のものとして、自然に柔らかに察知していた
のではないかという気がします。僕の小説は欧米よりも早く、日
本で一少なくとも日本の一般読者に積極的に受け入れられたい
たわけですから。それについては、中国や韓国や台湾といった東
アジアのお隣の国々についても同じことが言えるかもしれません。
日本以外でも、中国や韓国や台湾の読者たちはかなり早い段階か
ら（アメリカやヨーロッパで認められる前から）、僕の作品を積
極的に受け入れ、読んできてくれました。」（p. 239）

「日本語文化」を越境しつつ日本語に戻って書く文化越境的日本語表現者

柄谷行人

- 日本の現実に取り組みながら、世界的な課題も同時に考える
- いずれ翻訳されるという前提で日本語を書く
- 自分の日本語文章を英語に翻訳する際には編集を加える
- 英語が他の言語を超越した言語であるとは考えない
- 翻訳を前提としない日本語への欲求も抑圧しない

村上春樹

- 自分で書いた英語の文章を自由に翻訳して新たな日本語文体を得る
- 新たなリズムで文章を書く喜びを得る。
- 日本語の可能性を探るための新たな実験が日本語の再生につながる
- 作品に対する愛を共有する翻訳者をパートナーとして、アメリカと作家と同じように扱ってもらう。
- 地域的な取り組みが、やがて世界的な意味合いをもっていることがわかる。

3.2 文化越境的日本語の指針： ビジネス対応と移民対応

「モノ・ヒト・カネ」の越境が日本語の進化への圧力に

- ビジネス

- ビジネス向けの日本語教本の多くは、英語ライティングの原則の多くを踏襲。

- 定住外国人（≡移民？）

- 多文化共生のための「やさしい日本語」

➔日本語も、鎖国のような文化内在的发展ではなく、文化越境を前提とした发展をせざるを得ないのではないか。

➔だが日本国民の多くにその自覚はあるか？

➔自覚がなければ、AIを通訳の代わりにした文化的鎖国化が進むのではないか。



東証 プライム市場の企業に決算情報など英語で開示 義務づけへ

2024年1月22日 5時30分

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240122/k10014329351000.html>

ある企業：機械翻訳と英語でのコミュニケーションを通じて、
「翻訳しやすい日本語」がわかってきた。

- 翻訳したドキュメントを送るだけでOKというケースはほぼなく、細かいニュアンスや、仕様について質疑応答が必要です。そのやりとりは基本的に英語なのですが、（中略）精度とスピードの双方で、かなり改善している感覚があります。
- 何よりも、「英語でコミュニケーションする」という心理的ハードルが下がったことが大きいですね。以前は「あ、あの情報を伝えた方がいいかも」と思っても、英文メールを書く心理的なハードルが高かったのです。それが今は、気軽にできるようになり、現地のメンバーと密にコミュニケーションを取れています。
- また、数を重ねてくると、「翻訳しやすい日本語」も理解できてきます。するとメールでのやりとりはもちろん、日本語ドキュメントの書き方なども工夫し、コミュニケーションコストをさらに下げられるようになってきました。

3.3 AI利用による自己英語翻訳： 二次出版

自己英語翻訳（≡ 二次出版）

- 二次出版 (secondary publication) は二重投稿 (duplicate submission) ではない
 - 二次出版：同内容を別の言語で出版すること
 - 二重投稿：同内容を同じ言語で別の媒体で出版すること
- 日本語から英語への二次出版
 - 理系では、英語での出版を日本語の別媒体で出版する二次出版が多い。
 - ここで提案している二次出版は、日本語の文章を英語でも出版すること（同媒体でも別媒体でもよい）。
- 二次出版の翻訳は著者が行っても他の翻訳者が行ってもよい
 - 有名人でなければ、著者自身が行うことが現実的
 - AIは、外国語への翻訳という難事の実現可能性を高めた。

日本語から英語への二次出版の利点

- 著者個人にとって
 - （普遍的課題を意識しながらも）日本の文脈で問題意識を形成できる
 - 母国語での高速かつ精確な思考と表現ができる。
 - 国際的な知的活動への足がかりになる。
- 日本語共同体にとって
 - 言語文化中依存知識人の誕生？
 - 文化内在的日本語と文化越境的日本語の共存から日本語の進化を促進する
- グローバル社会にとって
 - 思考・表現の多様性を促進する（バベルの塔への警戒）

まとめ

3. 文化越境的日本語執筆とAIを使った自己英語翻訳

3.1 文化越境的日本語表現者：柄谷行人と村上春樹を例に

→ 柄谷も村上も、言語文化を越境することにより自らの日本語を育て、英語でも表現するようになった。

3.2 文化越境的日本語の指針：ビジネス対応と移民対応

→ ビジネスと定住外国人という現実は、日本人の言語観の変化を求め続けている。

3.3 AI利用による自己英語翻訳：二次出版

→ AIの支援により可能になる自己英語翻訳は、文化越境的日本語と英語表現力の両方を育てる。

おわりに

再掲：本日の構成

1. 大学英語ライティング授業でのAI活用

1. 抑制的な利用を積極的に推進：破壊的テクノロジーの葛藤
2. DeepL利用と日本語の限界：翻訳の葛藤
3. 英語執筆とChatGPTによる改訂：AI格差という葛藤

2. 日本の言語教育の現状分析：歴史・地政学・テクノロジー受容の観点から

1. 歴史：国語の熟成と起こりうる衰退
2. 地政学：英語圏の亜周辺
3. テクノロジー受容：日本語と英語にとっての両刃の刃

3. 文化越境的日本語執筆とAIを使った自己英語翻訳

1. 文化越境的日本語表現者：柄谷行人と村上春樹を例に
2. 文化越境的日本語の指針：ビジネス対応と移民対応
3. AI利用による自己英語翻訳：二次出版

本発表の限界

- 米国語の覇権状態に対する批判的考察をしていない。
 - 機械翻訳の時代の考察：柳瀬陽介 (2020) 「機械翻訳はバベルの塔を築くのか--大学教育課程での英語ライティング授業からの考察」 『ことばと社会』 編集委員会・編 『ことばと社会』 三元社 pp. 43-63.
 - ChatGPTの登場により「バベルの塔」の比喻の深刻度はさらに増した。
- 英語との関係でしか日本語を考えず、他の外国語との関係について考慮していない。
 - 米国に政治的・軍事的・経済的・文化的に依拠した国がこしらえた体制で仕事をする英語教師の陥穽

再掲：まとめ

1.大学英語ライティング授業でのAI活用

1.1 抑制的な利用を積極的に推進

➡汎用テクノロジーとして使わざるを得ないが、破壊的テクノロジーは使い方を間違えれば教育と学習が崩壊という葛藤

1.2 DeepL利用と日本語の限界

➡AIでの英語翻訳には国語指導が必要であるという葛藤

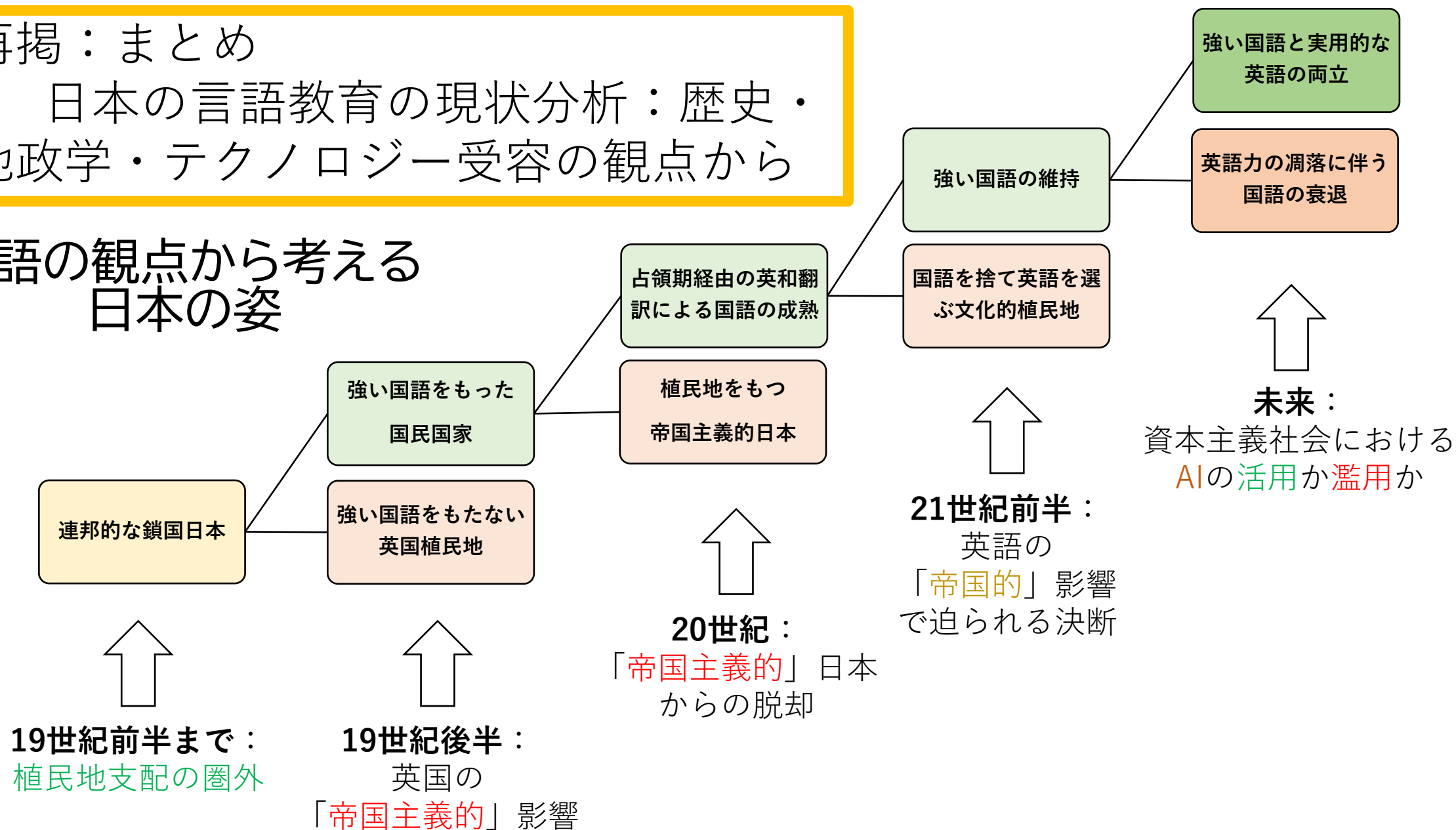
1.3 英語執筆とChatGPTによる改訂

➡AIは学ぶ意欲のある者の言語力をますます高め、学びから逃避しようとする者にいくらでも逃げ道を与えるという葛藤

再掲：まとめ

2 日本の言語教育の現状分析：歴史・地政学・テクノロジー受容の観点から

言語の観点から考える 日本の姿



再掲 まとめ

3. 文化越境的日本語執筆とAIを使った自己英語翻訳

3.1 文化越境的日本語表現者：柄谷行人と村上春樹を例に

→ 柄谷も村上も、言語文化を越境することにより自らの日本語を育て、英語でも表現するようになった。

3.2 文化越境的日本語の指針：ビジネス対応と移民対応

→ ビジネスと定住外国人という現実は、日本人の言語観の変化を求続けている。

3.3 AI利用による自己英語翻訳：二次出版

→ AIの支援により可能になる自己英語翻訳は、文化越境的日本語と英語表現力の両方を育てる。

新たな問い: 19世紀型国 民国家の21 世紀的変容 は可能か？

シンポ主題:生成AIの普及で日本語のコミュニケーションがどう変わるのか？

- 変化は、歴史的・地政学的・テクノロジー受容などの観点からの分析に基づく国民的意思決定に大きく左右される。
- 日本語の将来は、AIの技術の問題である以上に、日本を世界の中のどのような国にしたいのかという構想に影響される。
- 日本は、他の国家と連合しつつ、戦争・環境破壊・経済格差といった人類的課題に取り組む国家になるための日本語（国語）と英語（世界的言語）の力を身につけることができるか？

日本国憲法前文

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

ご清聴に感謝

- 柳瀬陽介（やなせ・ようすけ）
- yanase.yosuke.3n@kyoto-u.ac.jp
- <https://yanase-yosuke.blogspot.com/>
- <https://twitter.com/yosukeyanase>

ま、がんばってね。

